

# スタッフを続けるのもおまかせ：

## ダルクスタッフ A さんのライフヒストリー\*

南 保輔

### はじめに

本論は、薬物依存からの回復の途を歩いているダルクスタッフ A さんのライフヒストリーである。A さんは、大都市圏にある Y ダルクのスタッフとして利用者の支援をしながら自身も薬物を使わない生活をおくっている。A さんには、ほかのかたちでも登場していただいているが（南 2017, 2018）、本論はライフヒストリーの詳細版というべきものである。

A さんの回復の道のりは、一言でいうと「先は見えないがいまは居心地がいい」と表現できるものだ。A さんは、市販の咳止め薬依存で仕事をやめて Y ダルクに入ることになった。入寮後も使用をとめられずに、万引きしての使用を繰り返した。逮捕されて裁判、労役となるなかでようやくやめることができた。40 日間の労役後、Y ダルクに戻った。

Y ダルク入寮当初は、3 か月もしたら退寮して仕事をしたいと言っていたのだが、労役後は仕事探しにも熱が入らず、新しい入寮者の世話係をしていた。ダルクでスタッフの人手が足りなくなり、スタッフ研修となり、その後非常勤職員となっている。ダルクを出て一人暮らしをするとまた薬物使用をしてしまうだろうという不安が大きかったからだ。ダルクにいて仲間に囲まれている限り、再使用はせずにいられるという安心感があった。入寮者が薬物使用欲求とたたかっている

姿から力をもらってきた。収入がほとんどなく、離婚して別れた子どもの養育費は気になるが、「いまは居心地がいい」のである。

NA（ナルコティクスアノニマス）では、そのステップ 3 を「私たちは、私たちの意志といのちを、自分で理解している神の配慮にゆだねる決心をした。」としている（Narcotics Anonymous 2006: 39）。「神」ということばを避けて「ハイパーパワーにおまかせ」と言われることもある。A さんがダルクスタッフとなったのは、Y ダルクの施設長に言われてのことである。スタッフを続けるのもやめるのもこの施設長にゆだねている。A さんにとっては「おまかせ」のひとつなのかもしれない。

A さんには、Y ダルク入寮当初から話を聞かせてもらってきた。4 年以上にわたり、インタビュー回数も 20 回に達した。本論は、時間経過を意識した構成として、A さんの回復の軌跡を読者がたどれるようにした。

### A さんのライフヒストリー

調査者が A さんに初めてインタビューしたのは 2012 年 12 月上旬のことだった。10 月中旬に入寮し 1 か月半が経過していた。口数の少ない A さんとようやくのことで 20 分ほど話した。印象的だったのは、約 2 か月後にまたインタビューをお願いしたいと最後に言ったところ、「もういない

かもしれませんけど」と言われたことだった。そんなAさんが、入寮5年あまりが経過してもYダルクにいて、スタッフをしているというのは調査者にとっても本人にとっても驚きである。

Aさんは40歳代の男性で、ダルクにつながって5年半となる。20歳からずっと咳止め薬を使ってきた。ダルクに入寮してからもしばらくは、隠れて使い続けた。入寮して8か月後に万引きで捕まった。罰金か労役かと言われたが、けっきょく労役となった。この件をきっかけに、Aさんは咳止め薬をようやくやめることができた。

その後、クスリを使わない「クリーン」期間が3か月、6か月、9か月となっても、Aさんは仕事を始めなかった。スタッフから手伝いを頼まれているうちに、非常勤のスタッフとなった。ダルクを出て一人暮らしを始めると再使用してしまうことになることを恐れていた。

Aさんの両親は、Aさんが小学生のときに離婚した。母親に引き取られたが、母親は仕事で忙しくてあまり家にいなかった。5歳上の兄がいたが、家にいないことが多くて寂しかった。父親は「酒乱系」で、母親は「典型的なキッチンドリンカー」だった。中学生のときに母親が再婚した。相手は「面倒見の良いひとで《母親は》救われた」。

Aさんは中学校卒業後高校に進学したが、1週間ほどでやめてしまった。友だちの家で中学校時代と同じようにシンナーを吸ったりしていた。アルコールは体質に合わず、あまり飲まなかった。16歳の夏には、青果の仲卸業者に就職した。朝の2時から起きて野菜を配達する仕事だった。

17歳で一人暮らしを始めた。20歳のときに咳止め薬を飲むようになった。交際していた女性とのあいだに子どもが出来て、22歳のときに結婚した。子どもが3歳のときに離婚した。夫婦ともにギャンブル狂で、借金が500万円ほどあった。

妻の母親が、妻と子どもを連れていってしまった。その後連絡はない。

離婚をきっかけに風俗店に転職して、しばらく働いた。2、3年で元の仕事に戻った。だが、上司が独立したのでそれについていって、いろいろな仕事をするようになった。交際相手の女性に子どもができて、30歳のころに再婚した。子どもが3歳のころにまた離婚となった。

その間ずっと咳止め薬は使い続けてきた。40歳をまえにして、「自分でもクスリでどうにもならなくなった」と感じて仕事をやめた。貯金がなくなると生活保護にかかった。そして、ダルクに入寮することになった。

多いときは1日に7、8本咳止め薬を飲んでいった。再婚していたときは生活費から小遣いをもって買っていた。アパート代金などは収入から払えなかったようで、あとから聞くと、奥さんの実家から援助してもらっていた。自分は当時、「なにも考えていなかった」と言う（3回目インタビュー；以下③と表記、2013年4月）。

## ダルク入寮当初

Yダルク入寮当初、Aさんは居心地が悪そうだった。入寮した年のクリスマスパーティでは、ほかの入寮者と話すこともなく、ひとりで黙って演し物を見ている姿が南の記憶に残っている。インタビューには協力してもらっていたが、こちらの問いかけには応じるものの、その回答は短く、20分ほど話してもらおうのがやっとなんかということの繰り返しだった。

最初のインタビューでは、ダルクの生活について「すごいためになってるんだなって感じじゃなくて、ただ、一緒にくっついてるって感じ」（①2012年12月）だと表現した。12ステップについてテキストを読んではいた。ただなぜか、N

A（エヌエー，ナルコティクスアノニマス）のテキストではなくて，ダルクの居室にあったマッキーの『回復の「ステップ」』（McQ 2005=2008）だった。「人間の成長的」なことが書かれていると感じた。薬物の欲求が入ると「寝る」ということだった。<sup>1)</sup>

最初のインタビューで，ダルク入寮3か月で仕事を始めたい，ダルクはすぐにも出たいと言っていたAさんだが，入寮4か月となる2013年2月上旬の2回目インタビュー訪問時もYダルクにいた。

このころのAさんの心境を語るものとして，以下の発言が特徴的だろう。これは，ミーティングでどのような話をしているのかという問いへの回答である。とくに，「いまの気持ち」としてどんな話をするのかとたずねたため，「ミーティングです話」というよりも，この当時の「気持ち」，心境を語っているものと思われる。

南： そうするとじゃあ今の気持ちだとお出したいとか？

A： まあ，それも有り，まあ，出たいのもあり，まあ，多分，どっかでクスリをやりたいってゆうのもたぶんあるだろうし，お酒にしてもそうだし，まだそんな，自分でやめ，一生やめ続けるってゆう覚悟も，ないと思うし，ただ，施設に，ここにいて，うん・・・まあ，依存症って一生ものの病気だと，思うんですね，スタッフとか15年，16年とかやってて，それでも，ミーティングに3回とか週に出てるとか言うんで，だからまあ，そういうふう，に，やり続けられればいいかなってゆうふうに思ったりだとか，それで施設にいて，毎日おなじメンバーで話

をしててもあれなんで，仕事とかできたらいいなあなんて思ったりとか，そんな感じですかね。（②2013年2月）

ダルクを早く出たいという気持ちと，出たらまた咳止め薬を使ってしまうだろうというおそれとがある。そして，薬物依存はすぐに良くなるようなものではなくて，「一生ものの病気」だという考えはすでにこの時点で持っている。そのために，出たい気持ちはあるけれども，「施設にいて」ミーティングに出るということを「やり続けられればいい」と考えている。仕事を始めるまでの時期は，ダルクで午前と午後のミーティング，そして夜はNAミーティングに出かけていく。1日に3回というミーティングばかりで「毎日おなじメンバーで話をしても」あきてしまうだろう。それで，「仕事とかできたらいい」と思っているというのである。

後に取り上げるが，実は，Aさんは咳止め薬をダルク入寮後も使い続けていた。ダルクのスタッフやほかの利用者に隠してのことである。もちろん，調査者にも「とまっている」と話していた。「クリーン」は続いていると答えていたのである。

仕事を早く始めたいと言いつつ，仲間には入寮9か月や1年でまだ仕事をしていないひとが多く，入寮4か月では「とりあえず辛抱する時期」と言われて，そんなものかなと思っていた。

入寮後半年すぎの3回目インタビューの最後でも，次の訪問時にはいないかもしれないという話になった。だが，すこし手応えを感じているのか，Yダルクのことを「おもしろい場所」と言っている。

A： なんですかね，ほんとう不思議なんですよ。今までは逃げ出すのが当たり前っ

ていう気持ちだったんですよ。でも逆にいつ逃げてもいいよって言われちゃうといたくなっちゃって、くやしいなあと思うのが自分の中でいて、3か月最初がんばってて、6か月がんばってみて、普通に今これですからね、だから不思議な場所っていうか。おもしろい場所ですね、自分にとっては。 (③ 2013 年 4 月)

## 1 期 逮捕と労役

以後の期間について、本章では4期に分けて記述する。1期は入寮後10か月から1年4か月の時期にあたる。万引きしてクスリを使っていたAさんが、逮捕されて裁判で労役となり、労役後もダルクに戻ってきたという期間である。

### ④逮捕後の状況

実は、Aさんはこのころから市販の風邪薬を万引きして大量摂取していた。それが6月末に逮捕された。4回目の2014年8月のインタビューでは、この件が話題の中心となった。

逮捕されてなにかが変わったのだろうか。ひとつの変化としてミーティングで話せるようになったということがうかがえる。

A： だけどまあ、最初に比べたら、まあ今は自分の思っていることをそのまま話すように、出来るようには少しづつやっている最中というか。まえまでは、考えてることとゆってることがぜんぜんちがう。ちがうって感覚が自分の中にはあったんですけど、今は思っていることを素直に吐く努力しようみたいな感じですかね。 (④ 2013 年 8 月)

ダルクやN Aにおいては、「正直になる」ということが回復にとって欠かせないとされている。Aさんは、「まえまでは、考えてることとゆってることがぜんぜんちがう、ちがうって感覚が自分の中にはあった」と述べているように、正直ではなかった。万引きでの逮捕を経て、「今は思っていることを素直に吐く努力しよう」としている。

だが、「正直」という状態にはまだまだ遠い。「努力しようみたいな感じ」という表現が示すように、「努力」に向けて動こうとしている状態である。厳密にいうと、「努力」すらしていない。「正直になる」というのが変化だとすると、変化に向けて動きだそうとしている、といったところだろうか。

A： やっぱり、まあこのまま、おんなじことをやっても意味ない、と思うし、思ったってゆうのとやっぱあと、まわりのひとからもいろいろ言われてえまあ気付かされた部分も多々ありい、なおっているひとも、たくさんいるってゆう、のもありい、まそういうのを聞きながらあです。徐々に、まやって、いつてるところです。 (④ 2013 年 8 月)

このように「変化」そのものというよりも、「変化に向けての動き」というようなものだが、そのロジックは上述のようなものであった。それは、「おんなじことをやっても意味ない」という気づきである。薬物を使い続けて、正直にならずにいるというのが、これまでと「おんなじこと」である。

もうひとつ指摘しておきたいのは、まわりの人間からの助言に耳を傾けるようになったという変化があり、それが「なおっているひと」からの助

言であることが大きいという点である。スタッフも薬物依存からの回復者であり、自身の経験を踏まえて助言をしている。だからこそ「そういうのを聞」こうというのである。

逮捕後の変化のひとつに、「常に仲間といっしょにいる」ように心がけているということがあった。「ひとりだとつかっちゃう」おそれがあるので、ダルクでは入寮初期は入寮者たちがいっしょに行動するのが基本となっている。入寮して10か月となっていたAさんだが、その基本に立ち返るようになっていた。

いちばんの変化は、早く仕事を始めたい、早くダルクを出たいという発言が聞かれなかったことだ。

A： いや、俺もたぶん、言わないと思うんすよねもう。なん、なんか自分にも自信ないというか、はい。ま、今までえいさせてもらって、まうん、なんか、どうでも、そういうのはべつにどうでもいいかなっていうふうにおも、思いまして。べつに、1か月2か月3か月だとかっていうの、そんなのは意識してない今。なにごともなく一日が過ぎればいいかなぐらいにしか思っていないですね。

(④ 2013年8月)

NAミーティングで、薬物を再使用したことを告白するとクリーン1日目ということで白いキータグをもらう。この日から薬物を使わないクリーン期間を1か月、3か月と延ばしていく。そのようなかたちでクリーン期間を意識していくのかとたずねたところ、返ってきたのが上のことばであった。この時期は、万引き事件の裁判を控えて、「おとなしくしている時期」だった。

## ⑤ 労役は「まあこんなもんかってかんじでしたね」

5回目のインタビューは、万引きで労役となったAさんが40日間の労役を終えて出てきてからのことだった。

南： 労役はどうだったですか。

A： 労役はあ、あっという間に終わったというか、まあ、それによって二度とこんなところ入りたくないとか思わなかったしべつに。

南： ああそうなんですか。

A： 《笑》はい。まあこんなもんかってかんじでしたね。(⑤ 2013年12月)<sup>2)</sup>

収容されて朝から夕方4時まで軽作業をしたが、食事もおいしく食べて、健康に過ごすことができたAさんは言う。40日間の「あっという間に終わった」かんじであり、「二度とこんなところ入りたくない」と思うことはなかった。

労役後、ダルクに戻らないということも考えられたが、Aさんはダルクに戻ることを選んだ。その理由のひとつは、クリーン期間「3か月迎えさせてもらって、仲間の必要性とかそういうの、も感じれてきてた」からである。労役中は時間がたっぷりで、読書をしたり考えごとをしたりすることができた。Aさんはそういったことはそれまで苦手だったというが、すこしそのような時間を持つようになった。

前回8月のインタビューのときには、単独行動を避けることを心がけていたが、このときはそれほど意識していないということだった。薬物への欲求がそれほどではなくなっているようだった。ミーティングでの発言について聞いたところ、前回4回目のインタビュー時に始めようとしていた「努力」を実践しているということが報告



された。

A： いや、どうなんですかね。今、なんでもかんでも思ってることはいおうっていうふうにはしてるんですよ。だから、あんまりその、長い話をするとか、そういうふうな意識じゃなくて、いま、自分の状況を正直に、腹の中を話す。だから決して長い、自分の話っていうのは、多分出来てないと思うし、ま、おいおい、そういうふうに長い話になっていければ、まあ少しづつまあ、進歩していければいいのかなっていま思うし。前みたいにどんだけ、とりあえず出たい出たいだったんで。今はそうじゃない、そうじゃないんだっていうふうに思わされてきてるというか、ですねはい。病気の重さというのが今はなにか痛感させられてるというか。

(⑤ 2013 年 12 月)

「自分の状況を正直に、腹の中を話す」ことをしている。すこしずつ「正直」になっているようであった。

以前はダルクから出ることを最優先していたが、「そうじゃない」と思えるようになってきたのが以前との変化だと述べた。薬物依存という「病気の重さ」を「痛感」している。つまり、焦ってダルクを退寮すると、また薬物使用となってしまうと考えるようになったというのである。そのために、仕事をしたいという焦りもなくなった。クリーン期間が1年間となるまではとりあえずスリーミーティングに徹しようと考えている。

「回復」とはどのようなイメージかとたずねたところ、「新しい生き方を始める」ことだと回答であった。昔の生き方の問題点として、「刺激

を求めるところ」という自覚があるようだった。

## ⑥施設に感謝

6 回目のインタビューは 2014 年 2 月末だった。冒頭、A さんは「薬物使用がとまって、施設《ダルクのこと》に感謝している」と述べた。

南： その、あれですか。労役のこととか思いだしたりします。

A： は、あんまり短い期間だったんでえ

南： はい。

A： はい。

南： そうですか。 (⑥ 2014 年 2 月)

このときのインタビューでは、自分があまり多くを語れないことについて、A さんから調査者に向かって詫げる発言があった。「協力したいのだが、うまくしゃべれない」ということだった。その理由が話題となったが、A さんには、「自分のプライベートなことはひとに話すようなことではない」という意識がある。そのために、ミーティングにおいても長い話ができないという。その一方で、自分の考えや過去についてミーティングで話して掘り下げることが回復につながるのではないかと南が問いかけたのにたいして、それはそうだろうと A さんは同意した。南が、この時期に行っていた少年院調査で、内省をしていろいろ考えたという少年のコメントを聞いたこともあり、そのような方法があると話したところ、「そういうこともやっていかなきゃなって頭の中でわかってるんですけどね、なかなか」との回答が返ってきた。

A さんは、クスリへの欲求がすこしはある。あまり外出せずに、施設にいたことが多い。クリーン期間は 6 か月をすぎた。新しいメンバーのサ

ポートを課題としてすごしている。クリーン期間が9か月になったら仕事探しと言われていたが、自分に仕事ができるか不安になってきたとのことだった。

## 2期 仲間のサポート

Aさんの回復2期は、入寮後1年半から1年10か月の時期である。万引きで逮捕されてからは1年ちょっとのころになる。

### ⑦「なんか気が抜けた」

7回目のインタビューでは、「だいぶ落ち着いてきた、クスリの欲求もなく」と冒頭Aさんは語った。仕事探しを2か月ほどまえに始めるように言われたが、「まだなにもできていない」とのことだった。

A： なんか、今までクスリをやめ続け、ることでいっぱいだったのが、なんか気が抜けたとゆうか、なんかやる気がなくなったとゆうか。なんか、そうですね、仕事とか、が、あんまり、はい。なんかまえはあせってたんですけどね。

(⑦ 2014年6月)

Aさんは、状況を「なんか気が抜けたとゆうか、なんかやる気がなくなったとゆうか」と表現した。早く仕事をしたいと「あせってた」以前の状況とは対照的である。「なんにたいしても、やる気が失せているという感じになっちゃいましたね」と言う。

ミーティングでは少しずつ話すようになっていた。「ま以前よりは一まあ話すようにはしてますうはい。まえは一言二言で終わってたんですけど、まあなんでもいいから、まあ話すようには

努力している、ますね」と言う。話す内容に変化があるのかとたずねたが、自分ではわからないとのことだった。5歳年長の兄も覚せい剤依存で刑務所に何度も入っているということだったので、そうになってしまう「流れ」のようなものが家庭にあったのかとたずねると、「なるべくしてなった」といった回答であった。

A： んーんーんーどうなんですかねやっぱ、んー、まあ育つ、環境、とか、もあるんですよ。団地住まい、で暮らしてて、そんなに裕福じゃない家庭で育てえ貧乏暮らしのなかで。ま普通に、兄もグレてったし、自分もそうになって、いったしまあ、両親の離婚とかま、そんなかではあったんでしょけど。ん、ま、なる、なるべくしてなったのかなくて、ゆうふうにおも、思いますね。

(⑦ 2014年6月)

子どものころの家族の状況については、3回目のインタビューでも話してもらっている。父親が「酒乱」で母親が「キッチンドリinker」などといった話も聞いていた。だが、そのときは、事実を淡々と述べるということだったのだが、このときには、そういった生育史や環境を自身の薬物依存と結びつけようとしていることが感じられた。ミーティングで、自身の過去を語り、仲間の話を聞いているうちに芽生えたものであるとの示唆も得られた。

南： ○○(Aさんがサポートしている入寮者)さんはそんなすごかったんですか？

A： すごかったですねはい。もうほんとにいつ飲みに行ってもおかしくないような

状況のなかで、まあいつも我慢してて、ん。いつも「飲みたい飲みたい」ゆってて、それにいなんてゆっ、ゆえばいいのかとか考えてる、ん。だけど、この〇〇のおかげで自分もおあのクリーン、できて、出来はじめにもうこの子おがも通所から始まって、入寮してきたんですよね。なのでえ自分がクリーンつくれたのも、この子のおかげ、はい。自分のかがみみたいな感じ.hhに映ってて、はい。まあだいふ助けられたなってゆうふうに.hh思いますよね。だからひとでえ助けられてる部分ていうのはほんと多いんだなって.hhいまはあらためていなくなるとおもうしいはい。

(⑦ 2014 年 6 月)<sup>3)</sup>

A さんが「面倒みて」いた〇〇さんの依存物質はアルコールである。アルコールは身近にあるだけに、「いつも我慢」という状態にある。ダルクへの入寮初期は欲求がとりわけ強く感じられる。A さん自身が最後に薬物を使ったあとのクリーン期間が始まったところに、〇〇さんが入寮してきた。そのサポートをして、その様子をつねに見ていることが「自分のかがみ」となって、「クリーン《を》つく」ることができたと A さんは感じている。

なぜクスリがとまったのか、自分で振り返ってみるが A さんにはよくわからない。やめられなかったときは苦しかった。だが、新しいメンバーをサポートすることを通じて「クリーン《を》つく」ることができたと感じているというのである。

他方、労役については、「クリーンつくるきっかけ」だと捉え、「あれはあれで良かった」と思っ

ていた。

南： 労役のことは思い出したりします。

A： あまり・・・今となったらクリーンつくるきっかけになると思ってるんですけど、もう薄れちゃってるんですけど、もうほんとに入りたくないとかいう感覚ではなく、そういう苦しかったときっていうのも常に思っていないと、(いけないな)と思うし、やっぱりきっかけのひとつにもなったので、あれはあれで良かったなってゆうふうにも思います。

(⑦ 2014 年 6 月)

薬物使用が「なぜ」とまったのかは、A さん自身にとってもわれわれ調査者にとっても重要な問いであり、以後のインタビューにおいても労役の位置づけとともに繰り返し問われることになる。この時点では、「いろいろ 2 つ 3 ついろいろ重なって」と、とまった経緯についてのストーリーの素材となるものは用意されているが、それがまだはっきりとひとつの流れとしてまとめられていない。

そういった話のなかで、「本当に辛かったのはとまらなかった、ときですね」と発言したことにはとくに注目したい。薬物使用をやめたいがやめられない。しかも、みんなに隠して使っているという状態の苦しさを吐露したことばかりと思われる。

## ⑧ 「やる気がなくて困ってます」

8 回目のインタビューでの冒頭のことは、「なにもかもやる気がなくて困ってます」というものだった。仕事探しは、「必ずその都度その都度、いいわけみたいのを作って」あまりやってい



ないということだった。

8回目のインタビューは、クリーン1年のバースデイ直後だった。それについての感想をたずねたところ、「通過点」と感じているとのことだった。

A： んーなんかべつに感慨深いものとかはなくて、なんか通過点なのかなあて、ゆうかんじのほうが強かったですね。まあ、ほんとにクスリまたいつ使うかわかんないっていうのが自分のなかであるしいんー《間隙》そうですねなんか、そうゆうふうに油断とかすると、危ないのになってゆうふうに、つねづね思いますね。  
(⑧ 2014年8月)

もうひとつ注目すべきは、「クスリまたいつ使うかわかんないっていうのが自分のなかであるし」という発言である。クリーン期間1年というのは、薬物依存からの回復のひとつの重要な段階とされているが、その時点でも薬物の使用欲求はまだまだ小さくないということである。

そういった使用欲求の意識と平行するように、ダルクに「居つ」くことになっている。ダルクが「自分の居場所」となっており、退寮しようという考えはないということだった。「外に出ていく不安」が強いということである。

A： 今は、なんかぎゃくにここに、居ついたらってとゆうか、落ち着いちゃったというか、《間隙》なんか自分の居場所的なものになっちゃってる部分も多いのになって、でやっぱり外に出ていく不安だったりとかのほうが強いですし。

(⑧ 2014年8月)

二度目の結婚のときの妻と子どもとは定期的に会っている。そもそも、Yダルクへの入寮を希望したのも、2人の近くにいたかったからだ。入寮当初は早く仕事をして、子どものために稼ぎたいと話していた。だが、このときには子どもへの気持ちも仕事をやる意欲につながっていないようだった。

この当時、Aさんと前後してYダルクに入寮して、スタッフ研修をしている入寮者のBさんがいた。このBさんと同じような道を考えることはないのかと問いかけたところ、Aさんは「ぜんぜん考えられないですね」と回答した。問いにたいして「はあ」と発話して笑った、そのあとの回答だった。その後Aさん自身が、スタッフ研修を経て職員となったことを考えると、その成り行きは予想外としか言いようがない。とりあえず、この時点ではクリーン2年となるまで、つまりあと1年はダルクにいるだろうと話していた。

#### ⑨「ここにいていいのかな」

9回目のインタビューは8月下旬だった。Aさんはこの日の午後、就職面接に行くことになっていた。あまり仕事をやる気になれないと言っていたAさんだが、「なんでもいいからとりあえず働け」と施設長から言われて、気が進まないままに進めた仕事探しの成果である。

結果として、この仕事で採用されることはなかった。このときのAさんの心情として注目すべきは、Yダルクにいつまでもいられないという気持ちだった。

A： あと、やっぱり、新しいひととかが増えたり、あと通所のかたが見えたり、で、ミーティングのあの席がいっぱい埋まったりとかすると、なんかもう、

迫いやられてるとゆうか、そういう気持ちになっていくんすよ、どんだん。

南： ね、今日もこう、〇〇さん《古い入寮者》後ろに座ってましたけど、なんかやっぱ古株は前に座れないみたいな。

A： はい、ここにいていいのかな、とか思ったりとかぁはい。そういう感覚に襲われることがホント最近多くて、だから、まあそういうのもいい影響して、仕事探しとかにうまくいけばいいかなと思いますね。  
(© 2014 年 8 月)

Y ダルクは二階建ての一軒家を借りている。階下のリビングダイニングにある大きなテーブルを囲んでミーティングを行っていた。テーブルは四隅が丸くカットされた正方形で、かなり窮屈だが一辺に 3 人がなんとか着席できる。合計 12 人を越えると、テーブルのまわりだけではなく後列に座ることになる。このように「新しいひととかが増えて」、「迫いやられてる」気持ちになっている。それが「いい影響して、仕事探しとかにうまくいけばいいかなと思」っている。入寮して 1 年 10 か月をすぎた A さんにとって、退寮に向けて動き出すという動機付けになっていることがうかがわれる。

この日、もうひとつ特徴的だったのは、自身が「自己中心」的という反省が聞かれたことだ。

A： いや、もうホントに、クスリに対してもそうだし、ま、家族のことも考えてなかったし、ホントに、自分、が好きなようにお金とかも使ってたし、ホントにその、まわりのひとをみるっていうことがまったく出来てなかった、です、んー、自分ひとり、家族といっても、なんか自分

ひとりでって感じ、自分の好き勝手やって生きてきたなってゆうふうに思ってたね、はい。だから相手のこと思いやることとかもあんまり出来てなかったです。相手のこと考えて生きることも、あんまりしなかったです。ホントに自分、自己中心、てゆうのは、ホントに自分で強く感じてますねいま。

(© 2014 年 8 月)

インタビューまえに南が観察したミーティングにおいて、「自己中心的」ということが話題となり、A さんも発言していた。それを、良ければインタビューの場で説明してもらおうと水を向けたところ、上述のような回答があった。<sup>4)</sup>

NA において、薬物依存からの回復は、断薬と「スピリチュアルな成長」という二段階で考えられている (Narcotics Anonymous 2006；南 2014)。この日のインタビューで A さんに「回復」の定義についてたずねたところ、ちょうどこの教えを反映したような回答があった。

A： クスリ使わないのはもちろんなんですけど、まあ自分の生き方を変えていくってことなのかな。自分の考え方とか生き方とかをいい方向に変えていくようなことなのかなっていうふうに思いますねえ。

(© 2014 年 8 月)

ただ薬物使用をやめるだけでは不十分であり、「スピリチュアルな成長」をして、新しい生き方をしていくことが回復には欠かせない。A さんは、上の発言では、かつての生き方は「自分の好き勝手やって生きてきた」としている。そのような反省ができるようになったということは、「ス

ピリチュアルな成長」の一端ととらえることができる。

Aさんは、直後に就職面接を控えて、新しい職場ではNAミーティングに行けるような時間に帰らせてもらえるだろうか、あるいは、退寮して自立した生活ができるような給料をもらえるようになるだろうかといったことを心配していた。こういった心配をしているということは、12ステップのステップ3で言われるハイヤーパワーへの「おまかせ」ができていないと見ることもできるかもしれない。

労役については、以下のように言っている。

南：今日はまあ、労役っていうことを《ステップミーティングで》おっしゃいましたし、あとまあCさん《ミーティングの司会をしていた施設長》がそのまあネタにされたっていうか、例として出されましたけど、やっぱりい労役のとらえ方もかん、変わってきた？＝

A：＝そうそうですね、はい、うん、はいってるときとか、そのはいったときとかは、ぜんぜん、そんなときっていうのはなんとも思ってなかったんですね。あんまり、「まあ大したことなかったんじゃない」とか、んーまあ「1か月半ぐらいでえそんなところ行っても別に」とか、なに、なんか簡単に思ってたんだけど、なんかでも今になって思うとおやっぱり、ちょうどそのとき、とめはじめのときでえ

南：ふーん。

A：ええ、まあ自分にとってはーそういう経験が自分のとまった、ことと関係しているのかなってゆうふうに思ったりとか、してますええー（あの）警察に捕まった

ことだったりとか、労役に入る前なんですけど、あの、いろいろ、ん、どうにもな、なんなくなってたなって、んーですね、は思うーー思いますね。

（◎2014年8月）<sup>5）</sup>

NAでサービスをやれとスタッフに言われている。そうかもなと思いつつ、「でもな」とも思う。たいへんだからである。いまはNAのセク（セクレタリー）をしている。その仕事でもたいへんであり、そのミーティングがある土曜日になるのがちょっと憂鬱である。

A：ほんとにBくんとよく話すんですけど、Bくんに「サービスをやれ」ってつつつかれるんですね。「Aさんはそういうのにたずさわっていったほうが、Aさんのためになるから」って、「たぶん俺とよく似てて、そういうのに関わらないと」ってBくんのには言われるんですね。だから絶対タメになるからそういうのやっていこうとか、てゆうふうによく言われるんだけど。んー《笑》ただ、そういうふうに言われちゃうと、なんか今までは客観的に見て「すごいな」、「がんばってるな」って思ってたんだけど、なんかそんなこともなくて、なんか自分のためにやってるっていうふうに本人にゆってて。じゃあ、そのへんは同じなのかなって。自分も、まあこの先どうなっていくかわからないですけど、やっぱりそういうサービスとかに関わっていかないと、自信はないですよ、やっぱりこれから先、NAに繋がっていくとか、自信ないし、まあそういうふうには、考えを

聞かされると、「そうなのかな」なんて思う自分もいたりとか、してて、「サービスするとかやってかなきゃいけないんじゃないかな」なんて思う自分がいたり、反面「でもな」っていう自分が今はいますね。はい。 (© 2014 年 8 月)

同じ施設にいるメンバーの B さんがスタッフ研修をしている。その B さんについて、自分とは違う種類の人間だと A さんは思っていたのだが、「そうなんだ。同じなんだっていうふうになるようになってき」たということだ。

ここで問題となっているのは、薬物依存からの回復の初期から中期への移行である。ダルクプログラムでは、2 年間の入寮期間後、社会での仕事をしながら夜は N A のミーティングに毎日通うという生活が想定されている。N A への出席を習慣化するためにも、その役職につくということ（「サービス」をやること）が奨励されている。

N A サービスを熱心にやっている B さんのことを、A さんは「がんばってるな」と思っていた。だが、B さんは「自分のためにやってる」と言う。「自分も、まあこの先どうなっていくかわからない」のであり、「サービスするとかやってかなきゃいけないんじゃないかな」と A さんも思うようになっていく。

A さんには、仕事をしたくないという気持ちがある。仕事をすると、退寮して一人暮らしとなる。そうするとまたクスリを使ってしまうのではないかと感じている。仕事を「やる気」が起きない理由としてこのときにはこういったことが話されていた。後にもっと深刻な事情が明かされるのだが、それは後のことである。

### 3 期 スタッフ研修を始める

Y ダルク入寮後 2 年 2 か月から 2 年 9 か月の時期が回復 3 期にあたる。この時期に A さんは、Y ダルクのスタッフ研修を始めた。

#### ⑩「たまたまとまってる」

2014 年暮れの 10 回目のインタビューのときも、A さんには退寮に向けての動きはなかった。仕事は「ぜんぜん」で、「先の展望とかも自分にはぜんぜん見えなくて」とのことだった。A さんと同時期に入寮した仲間の退寮が決まっていたが、うらやましいというよりも、「たいへんだなってぎゃくに思」うとのことだった。新しい入寮者のサポートをしたり、オフィスの電話番を手伝ったりしている。スタッフにならないのかとたずねると、「そんな気はない」との回答だった。ミーティングで話すことは苦ではなくなったが、それ以上でもそれ以下でもないというかんじだった。

毎回聞いている労役についてだが、このときは労役そのものよりも、それにつながる流れをクスリがとまった「原因」としていた。万引きで捕まったのが 6 月であり、最後に使ったのが 7 月 20 日だった。この日は、裁判所で罰金か労役を選びなさいと言われた日だった。

南： 労役のこととか思い出します？

A： あんまり。たしかに労役 hh は、自分の中でも苦痛だったんですけど、自分がクスリ、ね、と、やめられたのは労役って部分じゃなくってもっとたくさんあったんで、なんかあの時期はいろいろ重なったなと思っていますね。

(© 2014 年 12 月)

総括としては、「やめなきゃってずっと思ってた、その時期は。んーなんだろうなあ、・・・たま

たまそれがタイミングだったのかなって思いますね」というものだった。

それまでは、労役は良かった、そのおかげでクスリをやめることができたという回答だったが、流れ全体を通じてとまったという言い方、認識に変わっている。この時期を、「必死になってやめようとした時期」であり、このときのことを「常に自分の中に置いておかなきゃ」ならないもののだとも言っている。

自分の状況を「たまたまとまってる」だけと評していた。回復しているひとというのは、「ステップだったりプログラムだったりちゃんと取り組んでいるひと」であり、自分は「まったく取り組んでない」ので回復しているとは思えないということだった。ただし、体調は良いようで、よく食べて「ぶくぶく太るだけ」とのことだった。

#### ⑪「やっと回復してきたね」と言われる

2015年年初めの11回目インタビューでは、主治医から「やっと回復してきたね」と言われたことが明かされた。仕事をしたくないと話したところ、「そういうことも言えるようになってきただろ」と評価され、Aさん自身は「愕然とした」。正直に思いを話すことができたというところが、回復しているという評価につながったということだ。

仕事探しは「まったく」進んでいなかった。「面接しようとか電話かけようとか、履歴書書こうとか、そういう気が一切ない」のだと言う。南にたいして、「どうしたらいいですか」とたずねてくるような始末である。スタッフからも、仕事探しをするように言われることもなくなった。それで、ほぼ「なにもしていない」。

プログラムと12ステップの学習についても毎回たずねて、とくだんテキストを読んだりしていない、勉強していないという回答が続いていた

が、この日はやや違った。

南： そのおステップのほうはどうですか

A： 《間隙》うーん、やっぱりい常にいあの一、いまは—そのプログラムとかステップは使わないで、自分のやり方で多分クスリをとめてる。ただだと思うんですよね、ええ。なんできつとおよくBくんが、あのミーティングで、自分のやり方だけで、その1年とか2年とかとめられるかもしれないけど、必ず行き詰まる、ときがくるって。そうなったときにいん、使うみたいなこと言ってたんですけど、なんかそういうのがなんか、理解できるというか、やっぱりなんか行き詰まるなあて、いうふうには考える。でもステップ、いいなと思うんですけど、まあ実際《笑》それを行動に移して、はなかなかできないんですけどおおあ、そういうのはなんか、わかるなあて、ゆう、ふうにも感じますねなんか、ん。

(⑪ 2015年1月)

Aさんのクリーン期間は1年半ほどとなっていたが、それについて「自分のやり方で多分クスリをとめてる、だけ」との理解を示した。このとり方は「行き詰まる」と言われていたが、それが「理解できる」というのである。だからといってステップ学習に力を入れて取り組むという気持ちにはなれないとも述べている。

Aさんと同時期に入寮した仲間が、このころに退寮した。その退寮のしかたが「自然だった」とAさんは感じていた。それは、退寮後の再使用のリスクなどをよく理解して、それへの対応も考え、「いっぱい保険をかけ」ている。ダルクを「出



たい」, ともかく出たいから仕事を探してという姿勢が, ダルク入寮当初は先行するものである。Aさんもこの仲間もかつてはそうだった。ダルクでの生活が2年を越えて, この仲間はお手本となるような退寮をしたのだが, Aさんにとって印象的だったようだ。

## ⑫スタッフ研修

Aさんは2015年3月からスタッフ研修を始めた。入寮期間が9か月や1年をすぎると全員「研修」とするダルクもあるが, Yダルクにはそういった決まりがあるわけではない。Aさんの場合は, それ以前からも電話番や新規入寮者のサポートといった手伝いをしていた。

外の仕事をイヤイヤやるよりは良いかと引き受けた。だが無給であり, 別れて暮らしている子どもの教育費を考えると, 「外で働いて, ちゃんと稼げるように」するべきかという迷いは残る。

他方, クスリをやめ続けていくということに関しては, 「すごいありがたい環境に居させてもらって」いる。「過去の自分っていうのは一人暮らししてて, なんかろくな生活をしていなかったっていうか, なんで, ひとりになったら, また, やっぱり怖いっていう部分がすごい強い」というのである。

Yダルクの施設長ともうひとりのスタッフは, 「志(こころざし)」をもってやっているが自分にはそれがない。「迷惑かけないようにすること」を考えてやるしかないと感じていた。スタッフになって変わったのは, 「仕事」と「割り切って」やっているということだった。

スタッフになって最初のころは, 入寮者の「あら」が目についていやだったと言う。部屋のあたりを消していない, ドアの開閉がうるさい, 足跡が床に残っているといったことだ。同じ入寮者の

立場では気にならなかったことが, スタッフという立場に立つと意識するようになった。すぐにそれほど気にならなくなったのだが, 立場の変化に伴って意識も変化したという例だった。

自身が「スピリチュアルな成長」をしているかとたずねたところ, これまでとはちがって, かなり力強く肯定するような回答があった。

南: ええ, スピリチュアルな成長とかしてますか。

A: まあ, 絶対してると思います。

南: ふーん, どんなところに。

A: あの, やっぱりこうインタビュー受けてても, 最初のころとはたぶんまったく違う話し方だと思うんですね。まあ, そういった部分だったり, 仲間に対してだったり, ええ, 絶対に変わってると思うし, はい, まあ, いまだによくわからないんですよ, その, スピリチュアルとかハイヤーパワーとかってよくわかってないんですけど, ええ, そのぶんわからないけど, あの施設だったり, そのスタッフの人たちだったり, あとは仲間だったりっていうものは信じてる, 信じてます, あと出て行った仲間に対して, はい, まあ, 自分には人に対してすごい変わってると思いますね, 以前も, 以前よりは。 (⑫2015年5月)<sup>6)</sup>

「信じている」ということが肯定的な回答の根拠となっている。「ハイヤーパワー」を「信じ」て「おまかせ」するのが, それぞれステップ2と3である。「ハイヤーパワーとかってよくわかってない」と言うように, ステップ2そのものとはいえないが, 「施設」やその「スタッフ」, 「仲

間」を信じており、その部分で「絶対に変わって」いる。これが、「スピリチュアルな成長」にあたるとAさんは考えている。

具体的に変化したのは、「お金の使い方」である。かつては、「たとえばお財布に5万円入ってたら、2万、3万使っても大丈夫だっていう使い方をしてた」。だが、さいきんは「なんかそういうことをしなくなった」というのである。これは、一種の喩えである。生活保護なのでそのような大金を持つことはない。1日に咳止め薬を8本買って飲んでいたようなお金の使い方はいまではしないだろうということだ。

しかしまだ、NAミーティングに自分から積極的に出かけていって、ステップ学習に取り組んでというわけではない。ダルクで暮らして、ひととのつながりのなかでクスリがとまっているというかんじである。

毎回たずねている労役についてだが、この日のインタビューでは、ほんとうにかなりまとまった回答があった。

南： あとなんかい、毎度聞いて恐縮なんですけどお

A： はい。

南： 労役のことは思い出します

A： はーあんまり思い出さないですけどお

南： んーん

A： あのやっぱり、えと牢屋に入ったことももちろんなんですけど.hh自分の場合は.hhその前の段階で裁判所であの、牢屋に行くか、罰金20万円払いますかって言われたときに、多分自分の中ではすごい大きかったんですよ、「ええ？」まあずっと、《間隙》うーん、《間隙》うーん、まあ、施設からも、あの、まだそん

ときは罰金はら、施設が立て替えて払うとかそういう話ももらってたんだけど、現実問題それを突き付けられたときに、すごいなんか自分の中では、最後にそれ、その聞いて、クスリを使ったんですね、その日に、

南： んーん。

A： ええ。でそれがすごい大きかったなって思うんですよ、だから労役がどうじゃなくて、その、罰金払いますか、牢屋に入りますかって、その言われたこと、がすごいなんか、自分として衝撃的だったのかなって思いますね、ええ。まあその、その、もう、なんか3か月前くらいから多分、そういう話はずっと自分の中で思ってたえ、ええ。で、ん、実際その、現実を突き付けられたときっていうのはすごい大きかったなーって思うし思う。それがなんかけっこう自分の中でターニングポイントになったような気がします。

(⑫ 2015年5月)

Aさん自身が「ターニングポイント」ということを使っている点も注目に値する。罰金となると、施設に立て替えてもらってすこしずつ返していくことになる。それは、初めてのことでない。だが、労役になると、自分で「牢屋」に入って作業をすることになる。この「現実を突き付けられ」たことがAさんにとっては「すごい大きかった」ことである。

### ⑬ スタッフをやりたいわけではないが、仕事もしたくない

13回目のインタビューは、AさんのいるYダルクが大きな出来事に揺れている渦中だった。A

さんよりも先にスタッフ研修をしていたメンバーが、ダルクを出ることになったからだ。それまで A さんは、施設長とそのスタッフ研修中メンバーの手伝いという位置づけだった。それが、施設長と 2 人きりとなった。施設長がいないときには、いろいろな判断を迫られる立場となったのだ。

ちょうど新しい入寮者が多い時期であり、施設の規則について説明を求められたりすることが多くなった。以前であれば、先輩のスタッフ研修者が対応していたが、その対応が A さんにまわってきて、それに追われることになった。

スタッフをやっていることが回復に役だっているかとたずねると、「自分にとっては必要なもの」と捉えていた。だが、自分のことを考える時間が減ったのはマイナスと捉えていた。スタッフは入寮者の「手本」となることが求められている。そのような面で、自分を「正す」意識を持たせてくれる意味で役立っている。

南： その、仕事探しをしようかとか。

A： 《間隙》なんてゆうかまったくくないんですよ、それはずーっと変わってないんですよ、あのケツたたかれてたときも、たぶん本質的にやりたくなかったんですよ、うーん、で、まあ、基本一人暮らしとかしたって、みんな出ていきたくて言うんですけど、自分はその感覚がやっぱり、今でもぜんぜん人よりは多分、隠してるのかどうか分からないんですけど、自分の中で、そういう気持ちっていうのがすごい少ないんですよ。

中村： 出ていきたいわけじゃないってこと。

A： そうですね、はい。

中村： かといってスタッフやられたいというわけでもない。

A： ないです《笑》。

中村： 仕事も別に。

A： したくない《笑》、はい、基本なまけもん、でしょうね。 (⑬ 2015 年 7 月)<sup>7)</sup>

N A ミーティングに、自分は必要だと感じるからという理由で週に 5 回行っている仲間がいる。だが、A さんはそのような感覚がない。ただ「義務」と感じて行っている。

先輩スタッフであこがれて目標にしているひとがいるかとたずねたところ、結婚して家族がいるスタッフの名字が挙がった。A さん自身は離婚した妻と子どもと定期的に会う生活を続けていた。

#### 4 期 スタッフの悩み

4 期は、入寮後 3 年経過後のことである。本論執筆時点では、A さんの Y ダルク在籍は 4 年半を越えている。

⑭ やらせてくださいってことばはいえないんですけど

A さんとの 14 回目のインタビューは、Y ダルクが大きな転換に向けて準備をしている最中のことだった。それまでは X ダルク法人のうちのひとつの施設という位置づけだったが、独自の法人を作って独立する手続きを進めているところだった。そのスタッフを決めるための話し合いで、A さんは、施設長の C さんに「正直な話」をしたという。

A： 《間隙》あの、先のことって、まったく見えないんですよいま。

南： はい。

A： はい。けっこう、C さん《施設長》には、正直な話をしてて、やる気とか、志とか

そういうものも、ないしい、なんかもうしわけないっていう気持ちがある。と。まあでも、与えてもらって、俺があの状況下のなかでさしてもらってるのは、すごい感謝はしてます。はい。で、「おまえどうすんだ」って言われたときに、「すみません。自分に自信がないので。やります、やらせてください。ってことばはいえないんですけど」っていういいわけをして。で、自分の逃げ場はCさんに《外で》「仕事しろ」って言われたらぶん自分はするようにするし、「なにしろ」って言われたら「します」と、「そういうスタンスではダメですか」っていう《笑》、逃げ方をしたんですよね。  
(14) 2015年11月)

Aさんの目から見ると、施設長のCさんは「志をもって」ダルクスタッフをしている。Aさん自身にはそのような志はない。だが、Cさんがやれと言うのなら、スタッフをやるという回答をしている。

スタッフ業務のなかで、Aさんはミーティングの司会に手応えを感じていた。ミーティングの出席者から、Aさんの話は聞きやすいとよく言われていた。「正直に自分のことを話す」のを心がけてきた。

自分の場合は、あんまり好きじゃないんだけど、「どういう意味があんの?」とかなんかいろいろなことを頭のなかで考えて、行き着いたのが、「自分、のことを話さなきゃ意味がない」ってことだったり、それは、「自分の言葉でえ自分の思いを正直に話さなければミーティングって意味ないんじゃないか」ってゆうところに行

き着いた。していたから、自分は常にミーティングってそういうことを意識してやってます、はい。  
(14) 2015年11月)

Aさんは、結婚して子どもがいるスタッフに憧れを持っていた。離婚した妻と子どもと毎週のように出会っているAさんにとっては、いっしょに仲良く暮らしている家族の姿がうらやましいようであった。しかしながら、スタッフとしてのあり方として、Aさん自身が「いいな」と思っているスタッフ(Dさん)はまた別にいた。

南： うんうん。Dさんの具体的にはどんなところですか。「自然体」っていつて。

A： あの、ダメなところも見して、「スタッフだからこうじゃなきゃいけない」みたいなものがまったくない。っていうか、くだらないことでふざけたりとか、一番最初にバカやったりとか。そういうのが「いいな」と思うんですよね。でいて、あのう仲間の話も聞かし、あのう、あんまり変なこともしないし。そんな感じですね。はい。  
(14) 2015年11月)

利用者に接するときのAさんの姿勢は、真面目でダルクの規則を守らせようといったものだった。Aさん自身、その弊害のようなものに悩むことがあった。XダルクのDさんというスタッフが「いいな」と思うのには、そのような事情が関係しているのかもしれない。

「研修」とはいえスタッフとなったAさんには、大きな疑問があった。施設長のCさんの指導方針が以前自分たちに対してのものと変化していると感じていた。自分たちのころは、入寮期間が3か月経過して仕事をしたいと言ったときに、もっと

じっくりと回復プログラムに取り組むようにと言われたものだった。しかし、いまは入寮3か月で仕事をするのを認めるひともいる。Cさんにその理由をたずねると、そのひとに最善の方法を考えているからという説明が返ってくる。

だが、当事者スタッフのAさんにとっては、自分が指導された内容がすべてであり、利用者に接するときにそれ以外のやり方は考えられず、それが悩みとなっていた。

A： はい。その部分って、なんか、「自分否定されてるんじゃないかな」って思ったりしますね。「いままでやってきたことって、なんだったんだろう」って、自分はそれでよくなってるって思ってるんですよね。

南： なるほどね。

A： ほんとクスリに関してとか、生き方とか。

南： はいはいはいはい。

A： ひととの接し方とか。が、自分にとっては良かったことだったんですけど、「いや、待てよ。今はちがうし」俺がよかったと思ってることを、この人に、ゆっても施設長がちがうことをしてるから、「え！」みたいな。（⑭2015年11月）

Aさん自身の回復を進めていくために、NAのスポンサーを決めて、12ステッププログラムをやっていくことが推奨されていた。Aさんはなかなかスポンサーを決めずにいたのだが、ようやく決めたということだった。依存物質が同じであるダルクの先輩スタッフにお願いしたが、Cさんとも親しいひとであり、親しすぎてやりにくいのではないかという懸念を持っていた。

⑮ひとのこと見てるけど、できることはないんだと

15回目のインタビューは2015年の暮れだった。入寮者の問題行動が続いたこともあり、Aさんは、自身のスタッフとしての対応をふりかえっているいろいろな気づきを得ていた。

小さなことだがショックを受けたのは、学校講演に連れて行ってもらえなかったことだ。「おまえのはなし短いから違うひとと行くわ」と言われたことがショックだった。以前、もっと長くしゃべる予定だったのが15分ほどで話せなくなってしまった。そのためだ、おまえはこれできないんだから」と言われたように感じたという。

また、「精神的にぶっこわれた」入寮者から「罵声」を浴びせられたのには大きなショックを受けた。その後出て行ってしまった彼を寒空に放置して、翌朝警察から保護したと連絡がきた。罵声にカッとなって放置したが、病院に連れて行くための対応ができたのではないかと後でいろいろ考えることになった。

ほかに、依存対象の風邪薬を万引きして捕まった利用者がいたが、やめられずに苦しんでいた自身のかつての姿をかさねていた。「自分がしてきたこととまったく同じことをしてる」と感じていた。

その対応として、本人に薬物使用をしているだろうと問い詰めるべきかと考えたりするが、やはりそれはできないという結論に落ち着くようだった。

A： この施設って、ひとのこと見てる、いちおうこうやって見てはいるんですけど、できることってないんだなって。あのう、で自分がやりたいことやってきたんで、そこまで一することもないなって。



やっぱり最終的には自分自身、になっていくんですね。（⑮ 2015年12月）

最終的には、本人が「自分自身」で万引きと薬物使用をやめないといけない。他人であるAさんは「できることってないんだな」と感じている。この思いは、当然Aさん自身にも跳ね返ってくることになる。

また、自身と同じ時期に入寮していて、退寮していった仲間の状況からもいろいろ考えさせられていた。スーパーマーケットで働いている仲間がいるのだが、自分が薬物依存の施設に入寮していたのを知られたくないからと、いまの入寮者に自分が勤めているお店に来させないでくれと強く申し入れてきていた。

別の退寮者には、他愛のないことで怒鳴りつけられた。この経験からは、「ひとつって調子悪い時にちょっとしたこと言われて反応して言うとか、そういう感覚なのかな」と考えるようになった。

この日のインタビューで特筆すべきは、Aさん自身が「変わってきた」という認識が示されたことだ。調査者が、しゃべることにAさんがかなり慣れてきたかとたずねたときの回答としてだった。

A： だいぶ変わってきてますよね。はい、たぶん。まったくしゃべんなかったですからたぶん。てゆううか、早く終わんねえかなとか。《笑》これからどっか行くんだとかそんなことばかり考えてました。まあ、ダルクに入って良かったんでしょうね。きっと。（⑮ 2015年12月）

南とのインタビューでしゃべれなかったのがしゃべれるようになったのは、「ダルクに入って良

かった」ことだとされている。もちろん、おしゃべりが上手になったという変化そのものが「良かった」ことではなくて、心情を正直に吐露できるようになったことであり、それで薬物使用がとまったということである。ダルクのおかげというのである。

薬物への欲求についても、かなり冷静に落ち着いた考えをするようになっていた。

A： 《間隙》目に見えてはないんですけど、たぶん、欲求に対してって、以前はずっと欲求はいったら使うって生活してて、自分が欲求はいつてるかどうかっていうのもわかってないんですね。で、今は無理くり、たとえばパソコンで、注射の映像見たら、欲求はいつてるんじゃないかとか、自分のなかでそうやって考えながらたたかって、考えるようになった。それを欲求っていうのかわかんないですけど。

南： ふーん。

A： 《クスリが入っている》ピンがあっていいなーって思ったりもべつにしないし。表立ってはないですね。ただ、欲求がなくなるわけがないって自分の中で思ってた、たとえば欲求がああいう、もうないって言いきったら自分は終わりだって思ってるんですよね。もうクスリは大丈夫ですとかそういう仲間の話とか聞くとおそれはなんか違うでしょって。《笑》思ったり。病気なんで、まったくなくても、あるんじゃないの？ってずっと考えてるような状態です。はい。

（⑮ 2015年12月）

⑩「まだまだでしょ」と思ってる

16 回目のインタビュー時には、A さんは 12 ステッププログラムの本格的な取り組みを始めていた。Y ダルクに同じころに入寮した仲間が始めていたし、施設長からもやるように言われていた。なかなかやらないでいると、スタッフの給料を出さないとまで言われた。

半年前に行われた 14 回目のインタビューでは、施設長が自分たちのころとは違う指導を今の利用者にはしているということで悩んでいた。だがこの 16 回目インタビューのときには、抱えている問題などみんなそれぞれに違うということを A さんは思いやるようになっていた。自分の経験を伝えるだけでは、回復指導としては限界があるということも考えるようになった。

Y ダルクには、A さん自身のかつての姿そっくりの利用者がいた。依存物質がアルコールで簡単に買えるということもあり、なかなかとめることができていない。隠れて使っているのだろうと A さんは見ている。

南： A さんからみてまだつかってる感じ？

A：《間隙》グレーですね。《笑》でも苦しんでいる。今苦しんでいるってみてとれるしでも葛藤してると思うんですよでもつかっててもいい。それはそれでいいとおもうし。

南： その葛藤は、どんな葛藤なんですか。具体的に、つかたいできたい。

A： あのおたぶん自分にあてはめちゃうんですけどあのやめなきゃって必死に頑張っている。頑張っているけどあるときパツていっちゃう。そういう、感じで使ってどうしようって、いうのプレてたりでもまだそこまでは、みたいな。でもそこで

おれもつかいたいんですってミーティングで言えるようになったらまたステップ上がるかなーとか。（⑩ 2016 年 5 月）

「やめなきゃって必死に頑張っている」のだろうと言う。だがそれでも、「あるときパツて」使いにいつてしまう。そして、使ったあとに「どうしよう」って困る。そういう繰り返しの状態だろうと A さんは推量している。まさに、万引きを繰り返して使っていた自分の状況を想起して理解している。そこから抜けだす道が「おれもつかいたいんです」とミーティングで話すことなのだ。

A さんは、そのような利用者のあとをつけていって、買った瞬間を取り押さえたりしたこともある。だが、そういったことをしたとしても、本人がなんとかしないとその後も同じことが繰り返されるだけである。15 回目に「見てるだけしかない」という心境を語っているが、これは A さんのスタッフとしての成長とみることができる。

その一方で、自身がパチンコに行ってしまうのをミーティングで話せないという悩みも抱えていた。仲間には、「パチンコに行っちゃいました」とミーティングで話せるひとがいる。なおさら A さんは、自身ができないのを意識することになっていた。

このときの A さんの心情をよく反映することは、「まだまだでしょと思っている」というものだ。これは、Y ダルクの事情についてたずねるなかでの発言だった。Y ダルクはデイケアプログラムを立ち上げようとして、場所を探していた。適当な物件が見つからずに、プログラム開始のめどが立っていなかった。

プログラムが始まると、A さんにもかなりまとまった給与が支給されることになる。それが実現しないことに焦りはないのかとたずねたときの回

答だった。つまり、スタッフとして給料をもらうには「まだまだでしょ」と自分では思っているということのようだった。そのような自己理解がAさんの現状であった。

その一方で、社会で仕事をしているひとを見て「うらやましい」と感じる自分がある。なんせ「まあいかんせんブレブレですね」と言う。

A： えー。まあいかんせんブレブレですね。  
あ、《間隙》お金の面とか、でもいまやってることは間違えてないって信じてる。部分であったりとか、仲間がよくみえたりもしかしたら自分はできるんじゃないかとかいやできないんじゃないかとか。ええ。いろいろなもんがありますね。  
(⑩ 2016年5月)

Aさんは、スタッフ歴も1年をすぎてかなり慣れてきていた。迷いはあり自分では「ブレブレ」というところはあるものの、安定した生活を送っているようだった。

これには、住み込みのスタッフ生活という環境が大きく関係している。インタビューが行われたこの日の夜には、Yダルク利用者の「OB会」がある。7人ほどで食事に行くのだ。Aさんはこの仲間をたいせつにしている。いっしょに温泉旅行に行ったりもしている。また、12ステッププログラムの取り組みを始めたのは、施設長にやるように強く言われたからである。ダルクに住んで、仲間のあいだで暮らしているからこそことであろう。

#### ⑪「ひとの変化はよくわかるよ」

17回目のインタビューは、2016年の10月だった。前回から5か月あまり経過していた。冒頭、

Aさんは、その回復プロセスをよく知るひとから、「ひとの変化はよくわかるよ」と言われたと話してくれた。それほど変化した、回復してきたということだ。そう言ってくれるひとがいて、ありがたいと感じていた。

自分で感じている変化としては、昔は「ひとに心開かなかった」ということだった。これは、インタビューにおいてはあまり話してもらえないということであり、南も当初は苦労したことだった。

スタッフとしての業務は、以前は施設内での利用者の支援が中心だったが、施設外での業務もすこしずつまかされるようになっていた。それで、施設長の手助けができていることに喜びを感じていた。

A： なんかやっぱそういうの自分、うれしいんですよ。その学校講演とかにも行くのもうれしかったりあ、やっぱりここで仕事してて、まあ慣れてはきているんですけど、でももう最初の頃は間違えないようにとか緊張しないようにとか。慣れてくると当たり前になってくるじゃないですか。そすると、物足りなくなってきた《笑》。まあまたなんか、っていうふうになっていくのかなって。

南： それはあの一頼りにされるのがうれしい？

A： そうですね。あの、頼りにされるまではいかないと思うんですけど、あのほんとになんか足しになればいいな《笑》と。

(⑪ 2016年10月)

Aさんは、スタッフ業務のひとつひとつに喜びを感じているようだ。ただある業務に慣れて「当た

り前になってくる」と「物足りなく」になってくる。そういったときに、初めての業務を新たにまかされると、「足しにな」っていることが感じられて「嬉しく」なるというのである。

その一方で、悩みをN Aミーティングで話せないということも感じていた。

南： じゃミーティングには行かれてはいる。

A： はい。それも、常にあるのが仲間の目とか、背中見せなきゃいけないとか。うん。それもあるし。そっちの方が大きいのかな。 (17 2016 年 10 月)

Aさんは、N Aミーティングに行ってはいるが、「仲間の目」が気になって正直に話せない部分がある。これはスタッフになったひとがかならず直面するものだ。スタッフとして利用者に対応する苦労や自身の欲求などは、本人に伝わるかもしれないことや、スタッフは利用者「背中見せ」ることが期待されているという意識からふつうのミーティングでは話せない。スタッフだけが参加するミーティングを開いて対応することになる。Aさんも、XダルクのEさんが主宰する月1回開催のミーティングに出席していた。

労役については、ほぼ毎回のよう聞いてきたが、この日のインタビューではかなりまとまった話が聞かれた。

南： じゃあまた労役のことを。最近労役についてなに考えたり思い出したり。

A： 《間隙》はないいいー

南： ないですか。

A： ないです。あの、もちろん振り返るんすよねあの、とう当時のじぶんというか、その捕まったとき、ええ、迎えに来ても

らったときとか、ええ、労役いったこと、思いかえすけど、うん。《間隙》やっぱり、やっぱりどう考えても、労役の体験はよかったんですよ自分にとって。いままでそうゆう、留置所はあったんですけど、拘置所とか刑務所と違って（なか）、確かにその、経験はよかったんですけど、あの、だからクスリとまったのか、じゃない、ですね自分はぜったいに。労役いだからとまったんじゃなくてえもちろんその、お金の面で出してくれる誰かが出してくれなくてえ自分でえやらなきゃいけないって、自分の責任を負ったって、いうのもあるんすけども、も自分そっちよりもおどうしてかってつったら、やっぱりまわりのひととあの、当時、しん親身に接してくれたひと？

南： はい、はい。

A： の力ってやっぱ大きかったなって。そっち、たぶんおれ、そっちだなって。ん、労役だからあとまったんだとか、てゆう、のも強かったんですけど、いやあ違うなっておも、思いはじめ。

(17 2016 年 10 月)

この日の最初に、「ひとの変化はよくわかる」と言われたというエピソードが聞かれた。それほど回復が進んだということである。上で引用した労役についての語りはそのことを具体的に示すものと言える。

そして、裁判の日から始まったクリーン期間が3か月、6か月、9か月となっていくころはほんとうに苦しかったという回顧も聞かれた。

A： もう、クスリのこと、感覚でいうとおも

う頭の中はクスリでいっぱい。全部がクスリに繋がっていくんです。あの、買い物いったらクスリつかっちゃうとか、ええっと、睡眠不足だからおれちょっとクスリ使おうかなとか、あ今日だれもないから使いにいかないかなとか、もうそればかり考えていたんですね。

南： んーん。 んーん。

A： いままでえこそわかるんですがそのときの感覚って。あの、くるし、苦しかったすね。《間隙》横に、なれなかった。で、クスリを我慢するために横になってる、のが、苦しかった。

南： ほお。

A： ただ横になっただけが苦しかった。

(17 2016年10月)

この回顧談の流れのなかで、やや謎だったAさんの姿勢が理解できるような話が出てきた。Aさんは、就職面接の準備をするなかでクスリへの強い欲求を感じて「こわくなった」というのである。

Aさんは、入寮当初は早く仕事について退寮したいという希望が強かった。だが、労役後には就業意欲があまり見られなくなった。仕事探し中、あるいは仕事につくとストレスがかかる。そのストレスが引き金となってクスリへの欲求が強まる。これを怖れてAさんの仕事探しの意欲は弱くなったということがうかがえた。理由としてAさんがはっきり挙げたわけではないが、そういうものとして十分に納得できるものだ。

Aさんは、ダルクとNAとのつながりを保つことの重要性をあらためて感じているようだった。入寮時の仲間の〇〇さんがそのような生活を送っていた。「まったくそこの部分の感覚」が自分自身と同じだと述べていた。

A： 〇〇はまったくそこの部分の感覚はおんなじで、つながってなきゃ自分は甘い方にくと。甘いほうにいったら絶対そっちの方に走るんだっていうのをすごい強く思ってるひとで、あのここにしょっちゅう来たり、NAにコンスタントに通ったり、仲間と関わりとか、すごい、意識してやってるんですね。

(17 2016年10月)

## ⑱親に会いに行けた

18回目のインタビューは2017年の2月だった。Aさんは、ステップの学びがすこし進んでいた。スポンサーを決めて取り組みを始めていたが、なかなか進まないという悩みがあった。それが、ようやくすこし進んだのが「進化」だった。

南： そうですね。えーステップはどうですか。

A： えーやってない。あ、でも、少しちょっと進んだのは、スポンサーシップが取れるようになってきたというか。まあずっと1年ぐらい前に〇〇さんをお願いして、まずこれやりなさいって言われたことを放置してて、それを1か月ちょっと前かくらいに見せた。見せれた。で、次これやってくれっていうふうに、すすめてくれた。ちょっと進んだっていうのが自分の進化で《笑》。(18 2017年2月)

労役を契機として薬物使用がとまったAさんだが、その要因としてNAなどのミーティングと仲間の支援の2つを考えて、そのどちらが大きかったのかとたずねてみた。Aさんの回答は「たぶん平行」というものだった。



南： その、ちょっとまた労役のころのに戻るんですけど、んーと、まあそうとも限らないですかねその、ミーティングに出る、ただ出る、ただ出るってことはないんでしょうけど、出るっていうことと、Aさんがクスリとまることに直接つながった人との関係性っていうつながりっていうのと、それはいっしょなんでしょうか。別なんでしょうか。

A： 《間隙》

南： どっちのおかげでとまったとか。

A： 《間隙》たぶん平行だと思います。先生のあれ《Aさんのライフヒストリーを元にした論文原稿》見てても、最初はもう壁作って、ほんとにうわつつらなことしか話さなくてあの、うそつき、ヤク中なんでもうそつきなんで、完全に殻に閉じこもってたのも、少しずつ出して、先生《南のこと》に出していったっていうのも、ミーティングがあったからだと思うし。あの、ですね。だからその、まあ自分が発信するとか、まあそれがあったからよかったことだし、逆に相手の想いを伝えてもらうとか、怒られたり、ひととの関係性だったりってゆうのはあの、もちろんそれもやっぱりなきゃいけないものだしみたいな。

南： ふうん。そうかそうか。そうですねーどちらかとかいう話じゃないわけですよねえ。

A： はい。 (18 2017 年 2 月)

分析的に「要因」を分けるということを研究者はおこなおうとするわけだが、そのように割り切れるものではないということだろう。

ひとつ大きな変化は、母親に会いに行ったということだった。薬物依存などでさんざん迷惑をかけてきた。

A： そうですね。なんか知らないけど。たまにその、《母親の家の》近くで研修があつてあのう、前乗りして、顔だけ見ていこうって。よくよく考えてみたら年も 69 歳っていう年齢で、なんか会ったときたいなあっていう感じになった。

(18 2017 年 2 月)

会っている時間は 1 時間もなかったが、連絡先を交換して「関係性つくれた」のは良かったと感じている。

#### 19 新しい仕事の喜び

A さんの勤める Y ダルクは、これまでナイトホーム 1 箇所のみでやってきた。それに、生活訓練のデイケア施設を加えようとしてきた。法人化や施設認可に時間がかかっていたが、ようやくその話しが具体化に向けて動き出した。

そんななか、A さんは利用者とぶつかりながらスタッフ業務に取り組んでいた。この時期、A さんは裁判の情状証人に初めて行った。これは、新しい経験であり、A さんは大きな手応えを感じていた。

南： どうですか。ついにやったなあという、

A： ありがたいですねありがたいです。でえ傍聴席の人に、有難うございましたって終わった瞬間に言われたときに、あ良かったなーって思ったんすよね。

(19 2017 年 5 月)

Aさんは、スタッフとしての高い志を持ったスタッフと比較して、自分のことを「志がない」としている。そういうなかで、新しい業務をして、それにたいしてお礼を言われるという経験は喜びであり、やる気につながっているようだった。

## ②スタッフの魅力はなんなんだろう

20回目となったインタビューでは、スタッフとしても回復面でもAさんの状況に大きな変化はなかった。

特筆すべきこととして、自身の薬物使用につながる自身の特性についてのある洞察が聞かれたことだ。以前のインタビューにおいて、咳止め薬を使用したのは「ボーとしたいから」と話していた。この点を再度確認する問いにたいして、「『依存歴の』後半はないと、もういてもたってもいられないから使ってた」との回答だった。依存症の「後半」はまさに「依存」だったということだろう。それに続いて以下のように述べた。

A： そう、よく思うのは、ふだんしらふで、ぼくのあたまってけっこう忙しいんだなって。あのうまわりにくらべたら、なんか、なにかが気になってみたりとかで、きもち多動な部分がたぶん、あるんですよね。 (② 2017年8月)

「ボーとしたい」という欲求の根底には、自身の精神が「多動」であり「けっこう忙しい」という気づきがある。この気づきも、スタッフ生活のなかで生まれたものと言うことができる。ADHD（注意欠陥・多動性障害）などの発達障害をかかえるひとがダルクの利用者には少なくない。スタッフとして、そのような利用者と接するうちに、Aさんも「多動」という自己分析に達してい

るものと思われる。

このインタビューでは、久しぶりに労役について、まとまった話を聞くことができた。それは、Yダルクの利用者のひとりが、Aさん自身が置かれていたのとはほぼ同じ状況にあるのをまじかに見たからだ。

南： そうだ最後に、どうですかさいきん、労役のことは。

A： 《間隙》仲間がやっぱり、いっしょ、自分、のかがみのようなかんじで、なんとか逃げたい、で自分で、きのう話してたのが、「1500円のなかから、1日500円ずつ貯金するんです」っていうんです。「1000円で生活だいじょうぶなの」っていったら、「だいじょうぶです」ってゆうんですよ。で、500円ずつためて、何か月ってゆったつけ、何年までいかないと思うんだけどなんねん、10か月とか、10何か月とかって、それやっていけば返せるんですってゆってて、なんか、ま、いまだけかなと思ってて、でもやっぱり、そのときの状況って、おんなじで、なんとか逃げたい、逃げたいっておれもやってたなって、なんとか逃げれないかなって、でそういうのをおもいださしてもらったりもするし、《間隙》で、そんなこと考えてたらやっぱ、回復、うんぬんの話しじゃないですよ。そっちのとらわれのほうが強くて《笑》。どうしようかどうしようかってやってるんですから、つねに。

南： ふうん。

A： あれなんですよほんとに、1か月間いつてくればいいのってっていう自分がいたり

とか、それ、いやあ、なんとか、まえの施設に、何万円あるからあそれを、返してもらえれば、それにあてられるって一生懸命やってるかれが、い、をみさしてもらってて、ああおなじだなって、なんなんですかねえ。なにが、やっぱ、刑務所とか、労役とかってやっぱり、経験のないひとにたいしては、けっこうハードル高いですね。はい。警察署まではいんですよ、たぶん。《笑》はい。

(㊤ 2017 年 8 月)

裁判で罰金か労役かと言われた入寮者の状況が話題となっている。罰金を払うことができれば労役に行かなくてすむ。その罰金を「返す」お金を作るために、1 日に生活費として支給される 1500 円のうちの 500 円を貯めているというのである。「なんとか《労役から》逃げたい」という気持ちがいっぱい状況にあるこの入寮者と自身はいっしょだったと A さんは言っている。罰金から労役かと言われたら、だれしも同じ心境になるということだろう。

だが、A さん自身がこの選択に直面したころのインタビューにおいては、南には「あんまり気にしてないですけどね」と言っていた (㊤ 2013 年 8 月)。当時はインタビューではほんとうに口数が少なかった。よそ者の研究者に心境を語るということではなかったと思われる。それが、心情を正直に認められるように A さんが「スピリチュアル」に成長したということかと思われる。

A さんと前後して Y ダルクに入寮し、回復初期の日々を共にした仲間が何人かいる。そのうちのひとりが、最近別の自助組織のスタッフとなることにした。その理由のひとつとして、A さんがスタッフをしているのを見てうらやましかったのだ

と言われた。また、A さんがスタッフとなる状況を生みだすことになった Y ダルクの元スタッフも、スタッフを再びやりたいと最近申し出てきた。A さんにとっては、ダルクスタッフがそれほど魅力的なものと感じていない。「その魅力はなんなんだろう」と思っている。

しかしその一方、「《ダルクスタッフをやめて》外にでて、あの、はたらきだしてっていう、ぜんぜんいいイメージが持てない」とも A さんは言う。つまり、社会の仕事をして、健全な生活が送れるとは思っていない。A さんにとってダルクスタッフというのは消極的な選択となっているのだ。

そのような A さんだが、スタッフとしての仕事にやりがいを感じていないわけではない。利用者の姿から学んで自身の回復につなげているところは大きい。また、以下のようなよろこびもある。

南： でえその、前はあ情状証人に初めて行ったっていうことでしたけど、その後は一

A： あの、そっち系はないですね、はい。

南： そうですか。

A： やっぱそうですねあの自分は、ほんとそうなんすよね。ちがったことをやったりするとよろ、よろこびに変わるんーですよねあの。でえいつも同じことをやっているとおぎゃくにそれが退屈にかんじちゃうというか。《間隙》あの、あのなんか、かちがうことをやってるときってたのしいんですよ。

南： ふうん。 (㊤ 2017 年 8 月)

慣れた業務の繰り返しという日常のなかで、新しい仕事をする「よろこびにかわる」。そのよう

な小さなよろこびをつみかさねつつAさんはダルクの仲間とともに回復の途を歩んでいる。

\*

AさんのYダルクでの生活は5年半になろうとしている。すっかり居心地がよくて、自分が「ダルクほけ」しているのかもしれないということばも聞かれた。ダルクを出て一人暮らしをするとまたクスリを使ってしまうおそれがあり、ダルクにとどまることを選んできた。そのなかで、仲間の支援からスタッフ研修、そして、正規職員となってきた。「スタッフとしてやっていく方向性が固まってきたというわけではない」ということだが、自分から出て行こうとは思っていない。いられるあいだは続けていこうと思っている。

## 注

\* 本論文は、科学研究費補助金基盤研究(C) 25380698「薬物依存者の『社会復帰』に関するミクロ社会学的研究」(代表: 南 保輔)の研究成果である。調査に協力していただいたダルクのみなさんに大いなる感謝を表したい。なお、施設名や個人名は匿名化している。なお、本論のまとめ的な文章が南(2018)である。また、Aさんの労役経験の意味づけの変遷に照準した論考が南(2017)である。

- 1) 12ステップの全体は、たとえば以下に見られる。これは「ホワイトブック」と呼ばれる、NAメンバーが常に携帯する小冊子である: <https://www.na.org/admin/include/spaw2/uploads/pdf/jp3101.pdf> (2017年11月22日最終確認)。
- 2) インタビューのトランスクリプト中のダブルパーレン(())は、南による注記をしめす。
- 3) 「○○さん」という表記だが、その部分ごとに指す人物は異なる。・hは、吸気音を示す。hの数はそれぞれの音の相対的な長さに対応している。
- 4) NAとダルクのミーティングでは、基本は「言いつばなし聞きつばなし」であり、そこでの発言について、ミーティングの外で話題としてはいけない。このインタビューの問いは、この基本原則に反しているが、2つの点で例外的である。ひとつは、このミーティングがステップを学ぶためのミーティングであり、「言いつばなし聞きつばなし」原則の適用外であること。もうひとつは、問いかけてみて、それに回答しないという選択はAさんにゆだねられているという点である。
- 5) 2つの発話が途切れなく密着していることは、等号(=)で示される。
- 6) ハイヤーパワーとは、自分自身を超えた自分よりも偉大だと認められる「力」のこと。12ステッププログラムでは、自分の意志や根性だけでは薬物依存を克服できなかったからこそ、自分を超えた大きな力に自分をゆだねていく、と考えられている。「神」と誤解されることが多いが、その「力」をどう解釈するかは各人の自由に任されている(ダルク研究会 2013: 374)。
- 7) 「中村」は、ダルク研究会メンバーの中村英代氏である。

## 引用文献

- ダルク研究会. 2013. 『ダルクの日々: 薬物依存者たちの生活と人生』 知玄舎。
- McQ, Joe. 2005, 1990. *The step we took*. August House. = ジョー・マキュー. 2008. 『回復の「ステップ」: 依存症から回復する12ステップ・ガイド』 依存症からの回復研究会訳。依存症からの回復研究会。
- 南 保輔. 2014. 断薬とスピリチュアルな成長: 薬物依存からの「回復」調査における日記法の可能性. 『成城文藝』 227: 62-42.
- 南 保輔. 2017. ターニングポイントはポイントではなくプロセスである: 薬物依存からの回復における「労役経験」. 『成城文藝』 240: 432-417.
- 南 保輔. 2018. 先は見えないが今は居心地がいい。

南；中村；相良編『当事者が支援する：薬物依存からの回復 ダルクの日々パート2』春風社.  
76-97.

Narcotics Anonymous (ナルコティクスアノニマス) .

2006. 『ナルコティクスアノニマス』 第五版日  
本 語 翻 訳 版 . Narcotics Anonymous World  
Services.